ハウスミカンで安定した生産・経営を実現
～次の世代への継承を目指してさらに邁進～

田原市　伊良湖ハウスミカン部会
果樹（ミカン）

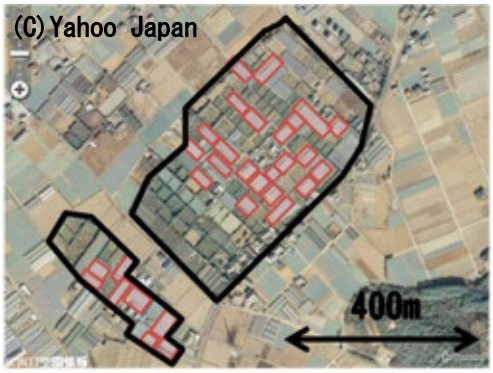
【平成 30 年６月 22 日掲載】

渥美半島の田原市保美（ほび）町でハウスミカンを生産する、愛知みなみ農業協同組合 伊良湖ハウスミカン部会をご紹介します。部会員６名という小規模の部会でありながら、構成員が20代から40代と若く、安定した生産と経営を実現している活気あふれる部会です。

部会の設立と概要

田原市保美町はもともと露地ミカン農家の多い地域でしたが、昭和 40 年代後半の価格の暴落がきっかけとなり、３戸がハウスミカンの栽培を始め、昭和 53 年の出荷開始を機に部会を設立しました。ハウスミカンは高単価で販売され高所得が得られたことから、近隣のミカン農家に波及しました。

現在は、部会員数６戸、栽培面積 3.5ha、年間出荷量約 210t で、栽培施設が半径 400m 以内に集まり土壌がほぼ均一であるという小規模のメリットを活かして、安定した品質で定評のある部会です。



栽培施設が集まっている状況
（ハウスは赤枠で囲んだ部分）

若い後継者に世代交代

この部会の一番の特徴は、現在の部会員の年齢が、40 歳代２人、30 歳代３人、20 歳代１人の平均 38 歳と非常に若いことです。彼らは親の安定した経営を見て育ち、自ら選んで就農した人ばかりで、就農して数年で生産の主体となりました。さらに、親が早くから後継者に生産を任せる土地柄により、部会のメンバーも世代交代が進みました。少人数で小回りがきき、部会の意思決定も早いことが特長です。

部会員の皆さん

重油価格高騰の脅威

平成 10 年代前半までは、重油価格はそれほど高くなく推移していましたが、徐々に上昇し、現在の部会員が就農した平成 18 年以降は、平成 10 年代前半の２～３倍にまで重油価格が上昇しました。冬期に夜温 24℃という高温の設定が必要なハウスミカン生産では、重油価格の高騰により経営がひっ迫するようになり、ハウスミカンを辞めて他の品目に転換するか、継続するかの判断を迫られました。しかし６名は、栽培面積を減らしたりすることなく、親から譲り受けたハ

ウスを最大限に活用して、低コストで効率の良い加温方法としてハウスの被覆の多層化やヒートポンプの導入などに取り組んで乗り切ってきました。

安定生産の取組

枝吊りの様子（紐で枝を吊ることで、太陽光を樹の中に入れ、果実の重みに耐える）

重油価格高騰に対応できるようになり若い部会員の技術も安定してきた矢先の平成 23 年、部会の平均単価が前年比 87%という大きな下落を経験しました。酷暑のため全国的にもあまり品質の良くない作ではあったものの、大変な経費をかけて施設で栽培するハウスミカンにとって、このような価格低下は経営不振に直結します。このとき、全員で部会としての方針や目標について、改めて意思統一したそうです。

部会の方針は、樹に過剰な水分ストレスを与えて糖度の高い果実の生産を追及するのではなく、実需者のニーズを考慮し、「糖度 12Brix 度以上、酸含量 0.9 パーセント未満とバランスの取れた品質の果実を確実に生産し、収量を確保する」というものです。部会では、満開後日数に応じた果径、糖度及び酸度の指標を決めており、月１回以上果径や果汁を測定してその指標と照らし合わせ、果実の状態に合わせた栽培管理（着果数、温度、かん水管理）を実施しています。

また、ハウスミカンの需要期の旧盆前である７月下旬から８月上旬の出荷量を確保するため、半数以上のハウスを 12 月上中旬に加温し、全出荷量の４割にあたる約 90ｔを集中出荷しています。栽培工程の一つの失敗が品質低下や不作の要因となるため、温度管理、摘果、枝吊り、水管理、収穫など、手をかけるポイントとなる作業は、ほ場巡回において部会員同士で確認しながら適切に実施し、部会全体で安定生産に取り組んでいます。

さらなる単収向上と経営安定に向けて

化粧箱に入った
贈答用の商品

どの部会員も家族労働が基本となっており、施設面積の拡大は容易ではないことから、個々が単収を向上させて所得向上を目指すことが重要と考えています。樹勢を強く維持することがポイントとなることから、水分ストレスを与えすぎないよう制御していることに加え、堆肥の施用や客土などそれぞれの判断で工夫をしています。単収は、15 年前と比較して 25%向上し、県内平均収量も大きく上回っていますが、さらに上を目指すべく技術改善に余念がありません。これらの技術と経営の安定に向けた取組が評価され、平成 27 年に全国果樹技術・経営コンクールで農林水産省生産局長賞を受賞しました。

現部会長の井上知則さんは、「重油価格高騰は常に心配事だが、危機に遭遇しても柔軟に対応して、部会としてできるだけハウスミカンを続けたい。次の世代が就農したいと思える経営を維持できるよう取り組んでいく。」と話してくれました。

Copyright (C) 2018, Aichi Prefecture. All Rights Reserved.

執　　筆：農業経営課
取材協力：東三河農林水産事務所田原農業改良普及課